

## 丁寧語 確認テスト（侍り・候ふ） | 定期テスト対策 | 誰でも古典塾 解答・解説

問1 「渡り侍りし」＝丁寧語・補助動詞（「渡って参りました／渡ってきました」と聞き手を高める）。「琴に侍り」＝丁寧語・本動詞（「～である／～でございます」、断定の「に」＋「あり」の丁寧）。いずれも語り手から聞き手への敬意。

問2 丁寧語。問いに答えて聞き手に「(西の対に) おります・ございます」と述べているもので、「あり・をり」の丁寧の本動詞。現代語訳は「西の対におります (ございます)」。係助詞「こそ」の結びで已然形「候へ」。

問3 謙譲語。「帝の御前に夜昼候ひて」は、帝のおそばに「お控え申し上げて・お仕えして」の意で、動作の及ぶ相手（帝）を高める。敬意の方向が聞き手ではなく、動作の対象である帝へ向かう点が丁寧語との違い。

問4 補助動詞。「賜り（受け取り）」に付いて「～ました」の意を添える。丁寧語で、手紙文として読み手（差出先）を高める。

問5 補助動詞。「咲き」に付く「～ました／～ですよ」の丁寧。現代語訳は「咲いておりました（咲いたのでございます）」。

問6 丁寧語・本動詞。「こちらにはおりません・ございませぬ」の意で、「をり・あり」の丁寧の本動詞。聞き手（来訪者）への敬意。

問7 「(久しく) になりました」。「なり」に付く補助動詞の丁寧。

問8 丁寧語・補助動詞。動詞の連用形「まかり帰り」の下に付いて「～ました・～ております」の意を添えている（「まかり帰り」自体が謙譲語）。「奏す」＝帝への言上の場面なので、聞き手である帝への敬意を表す。（※帝に対してへりくだる謙譲（丁重）の用法と説明する説もある。）

問9 話し手（言いつける人）から聞き手（言いつけられる相手）への敬意。「申し候ふ」の「候ふ」は丁寧の補助動詞で、聞き手を高めて「申します」と述べている。

問10 丁寧語・補助動詞。「持て参り」に付く「～ました」の丁寧で、語り手から聞き手への敬意。

問11 「御前に候ひつれ」＝謙譲語（御前にお控え申し上げる・お仕えする）。「知り侍らず」＝丁寧語（存じませぬ・知りませぬ、と聞き手を高める）。理由：前者は動作の及ぶ相手（御前＝貴人）を高め、後者は述べる相手（聞き手）を高めるため、同じ話者の同じ発話でも用法が分かれる。

問12 「仰せに侍り」＝本動詞（断定「に」＋「侍り」で「～でございます」）。「参り候はむ」＝補助動詞（「参り」に付く「～ましよう」の丁寧）。

問13 謙譲語。「内裏に候ひ給ひて」は大臣が内裏（帝のおそば）に「お仕え申し上げなきて」の意。さらに尊敬の「給ひ」が付いており、語り手は大臣に敬意を払いつつ、大臣の動作の対象（帝のいます内裏）への謙譲として「候ふ」を用いている。丁寧の補助動詞なら直前は連用形の動詞となるが、ここは「内裏に」という場所＋「候ふ」で「お控えする」意の本動詞的用法である点も手がかかり。

問14 「持たれ侍りし」＝丁寧語・補助動詞（「お持ちでいらっしやいました」、尊敬「れ」＋丁寧「侍り」）。「物にて候ふ」＝丁寧語・本動詞（断定「にて」＋「候ふ」で「～でございます」）。いずれも語り手から聞き手への

敬意。

**問15** 丁寧語。「降りますにちがいない」と聞き手（進言する相手＝貴人）に述べる丁寧の補助動詞。敬意は聞き手へ。

**問16** 「住み侍れば」＝補助動詞（「住み」に付く「～ております」）。「まれにこそ侍れ」＝本動詞（「あり」の丁寧、「ございます・おります」）。現代語訳は「（訪ねる人も）めったにございません」。

**問17** 「ございます」に当たる本動詞の丁寧の例は、①「琴に侍り」、⑫「仰せに侍り」、⑭「物にて候ふ」、②「西の対に候へ」、⑥「候はず」、⑯「まれにこそ侍れ」などのうち二つを挙げればよい（例：①と⑯）。

**問18** 会話文は話し手が目の前の聞き手に、手紙文は書き手が読み手に向けて述べるため、その相手に直接敬意を表す丁寧語がふさわしいから。相手を高めることで、ていねいでへりくだった物言いになる。

**問19** ①敬意の方向で見る…述べる相手（聞き手・読み手）を高めていけば丁寧語、動作の及ぶ相手（貴人）を高めていけば謙譲語。②文脈・直前の語で見る…動詞の連用形に付いて「～です・ます」を添えていけば丁寧の補助動詞、「あり・をり」の意で単独なら丁寧の本動詞、「御前に・おそばに」など貴人のもとに「お控え・お仕えする」意なら謙譲。

**問20** 補助動詞は（あ）咲き侍り、（う）御前に候ひ、（え）なり侍り。

※（い）琴に侍りと（お）西の対に候へは本動詞（断定・存在の「あり」の丁寧）。なお（う）は補助動詞的に動詞「候ひ」が用いられているが、本問では「御前に候ひ＝お控えする」を謙譲の本動詞と見る立場もあり、設問①・③の文脈では謙譲。ここでは語形の上で動詞連用形に続く形を補助動詞として選ばせる趣旨。最も確実な補助動詞は（あ）（え）の二つである。

**問21** 傍線②は聞き手に「（西の対に）おります」と述べる丁寧語で、敬意は聞き手へ向かう。傍線③は帝の御前に「お仕えする」謙譲語で、敬意は動作の及ぶ相手（帝）へ向かう。同じ「候ふ」でも、高める対象が聞き手か貴人かで丁寧・謙譲が分かれる。